

江戸の花卉

さくら草

房総のむらでは、伝統的なさくら草の品種を育てて、商家の町並みで展示しています。

 場所 辻広場
 期間 5月上旬（花の状態によります）。



さくらそうの仲間は、湿った寒冷な気候を好み、日本には十四種の野生種が、高原や原野に自生します。

さくらそうは、江戸時代になってから、上流から流れ着いたたねや根株が、荒川の原野に群生を始め、江戸時代中頃に、そのさくらそうを掘りあげ、栽培するようになりました。また、自然の中で変化した花を見つけ、たねを採り、栽培を続けるうちに、新しい花が生み出され、1860年頃には、200を超える種類があったようです。

最初にさくらそうの栽培を始めたのは、江戸の旗本や御家人といった武士階級の人々でした。次第に、その魅力は、町人たちの文化に広がり、町には掘ったさくらそうを売り歩く「桜草売り」も見られるようになりました。